

醍醐天皇 : 文苑

著者	笠間, 益三
雑誌名	龍南會雜誌
巻	25
ページ	42-43
発行年	1894-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/4374

御稜威の光を仰ぐあり

御稜威の光を仰ぐなり

第三段

こがねの蜂もしら雲の

たつたの山も千代よばふ

聲うちろへて高らかに

歌ひ巡るも君と代の

今日の吉事を祝ふある

心つくしのますら男の

只一すぢにいさむあり

只一すぢにいさむあり

醍醐天皇

教授

笠間益三

人君者以一人位於億兆之上。而天下之事一日萬機。固不可以一人而治也。故舉賢進能。上下大小各授其職。任其責。而後天下治也。然用人之難。有不可言者焉。何則。舉賢進能。我之所大欲也。我既以爲賢矣。而其人或非賢。則未可謂能用人也。我既以爲能矣。而其人或非能。則未可謂能用人也。擯姦逐邪。則亦我之所欲也。我既以爲姦邪矣。而其人或非姦邪。則謂之善捨人可乎。故用人固難也。知人爲尤難矣。自古雖有明知聰敏。可有與爲之君。往往失於不知人也。而其心自謂能。用賢能。能擯姦邪。孜孜圖治。朝夕不暇。可謂勤矣。而及其功績。則不足以述祖宗之法。不足以貽子孫之謀。孟子所謂徒法不能自行者也。如延喜之朝。君臣勉政而不怠。文物制度爛然可觀。後世言治者稱延喜。而至用人則大不然也。非不欲用賢也。不知賢也。菅原道真。當時才德無比。不可不謂賢也。宇多帝知之。故其禪位。敎帝用之。帝舉而加之相位。可謂善用人也。而及一旦聞時平等之讒。則毫髮不疑。貶竄之如

逐奴僕然。使帝能知道眞之賢。則上皇之所屬。名望之所歸。雖有百時平。安能問之乎。由是觀之。帝之用道眞。非眞用之也。實不知之也。嗚呼。使帝深知道眞而用之。專任之而不疑。則延喜之治。貽謀子孫。豈止於此乎。以帝之明識。尙如此。況於暗君庸主乎。故曰。用人之難。有不可言者焉。而知人爲尤難矣。雖然。管公之可用。而時平之不可用。今而觀之。蹇兒亦知之。在當時。則雖大人君子。蓋亦有不知之者。故觀其跡於後。則忠姦邪正。可歷歷而指也。察其心於當日。則有未可遽辨者焉。用人之難如此。後之爲君者。可不戒哉。

晨起

黒本稼堂

上

人の銳氣。一身にミちミちして。寸隙もなき時は。朝アサざりけり。兵書に。朝氣は銳し。といへるも。げにさることなり。故に朝の務だに行はゞ。一日の業も。殊の外。はかくしく。何事をもとりこせば。心の長閑あることは。いつも春の日のうららかなるかごとし。さるを。この時に怠たらむ人は。一日の業。つぎつぎにありゆくまゝに。一年三百六十餘日の又またも。皆後をがちにすれば。心のせはしきことは。つねに冬の日のせむるかごとくなるへし。しかはほれど。その起くる時よ。いかにも。ものうし。とらへば。勇者あらでは。なりかたき。とを覺ゆる。雨のしめやかよふりたる春の朝。霜のいとしろうたける冬の曉あけとは。殊に堪へがくや。あらむ。されども。之を刈カリ薦コモのみだれの苦しきに比へば。何事かあらむ。これにしも。堪へん人の少きさは。世に勇者の多からざるなるへし。人にして。勇ゆうをくば。志あり